



へへ。なんなら、

ダンジョンの中を閉じ込めて、

毎日欲望をぶちまけてやる！

ぬい、

はっ

はっ

「おや、妖狐さんお一人！」

これはこれはめずらしい客人だな！どうぞ座ってください。名前は何と呼べばいい？ご注文は？

「九輪でいい。清酒を頼む。」

「あそこの妖狐さん、身なりからして、ただものに見えないな……」

九輪が来てから、酒場は少し騒ぎになった。

しかし、この妖狐さんが無口で元気もなさそうだと分かったら、すぐ元の様子に戻った。

「聞いたか？南西の洞窟で最近また変な音がしたそうだ……」

「また魔物が住みついたかもしれん。」

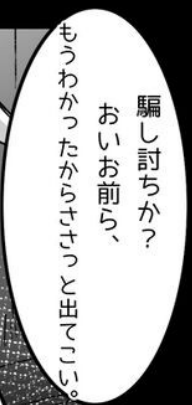
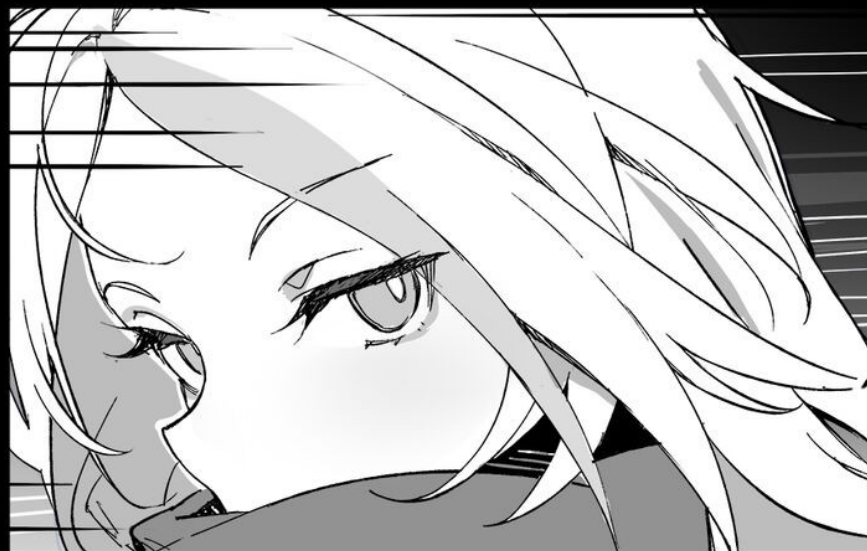
「魔物があれば宝もある！討伐してみるか？」

「遠慮しとく。なるべく離れるようにするよ。」

「命を落としたくないからなあ……」

九輪さんは聞こえた。

「宝さえ手に入れば、酒をいくらでも飲める。」





お前らの欲望の匂いは気持ち悪すぎて、
ずっと遠くからわかってたのよ！
それに、その人数でやるつもり？
随分あたしを見送ってるじゃない。

全員まとめてかかってこい。
人間の分際であたしに勝てると思うな。



さすが妖狐さま。
嗅覚がするどいねえ。
これでも避けたとはな。



その煙は……

どこで手に入れたの？

普通なもの
じゃない……



——待って

は？わかってないのはあなたたちだろう？
ただの山賊のくせに、能力値は
人間の中でも弱い存在にすぎない……



うわ、こわ。
もしかして、
妖狐さまはまだ自分の立場が
分かっていないようなわ？



おや？結構効いたじゃん

これはせうかく手に入れた
妖狐退治の秘薬だぜ、
効だけじゃだめだぞ、
妖狐様よ、

卑劣な人間どもめ……
あ……あたしに近づくな！

ずっと何と言ってたっけ？
その弱い人間は
今犯した来たんだぞ？>>>

狐さんってスタイルいいよな、
おっぱいこんな巨でかいし。
「この俺が揉んでやる！」

おいおい、
下は履いていないのかよ？
こんな姿でダンジョンに入るなんて、
まさか戦敗プレイを狙ったのか？

お尻も白くてでけえ！
そりゃ叩いて俺さまの痕を残さねばな！

俺も、妖狐のマンコに入れてみてえ！

興奮しすぎてこんな巨に
濡れてるじゃねえか「の淫乱狐は！
もっ我慢できねえ！」

上の穴も中々いいじゃねえか！
ぐっした、
噛みちぎる力もないのか？

この…
野郎…葉がなきや、
絶対こころしてやる…



「この淫乱穴はマジで最高なんだぞー
熱いし、じっくり濡れてるし、
すげえ感じるー」

「ケシも」っすに詰ってへるし
こんなに気持ちいいのは
久しぶりだなー

「このピッチ狐の体に、
まだ使えるアナがあるよ」

「もう出るぞー！
ちゃんと受け取れよー」

「や、だめ…いた、
わああ…」

「野郎ども、こっち来てー発やれよー」

「うえ、
精液の匂い…
気持ち悪い…
ぐく…」





前も後ろもどのアナでも絶品だな！

あ♡

0

11/4

カ

ふう……ふう……まもちいい……

このままずっと押し倒したままやりてえ！

(終わっ
たか
…)

俺様が一番最初にやるって言っただろ？
抜け駆けたなおめえらは！

カサ...

けど気持ちは分かる。

こいつはおまえらの小さなもんで満足できなくなるからな！

あ



い
い
ち
:

そんなに大きなもの：

入れないよ……



(もう…ダメ…)



一発で絶頂させる！

よし、



はっはっは、妖狐を犯したら、
やっぱり感じ違うな！

(ううう…「ほん」ほん、
もう息がでな…)

へえ、首に絞められたら、
マンコも締まってくれる。
こんなに興奮しやがって、
どんだけのビッチ狐なんだ！
大人しく俺様のザーメンを受け取れい！

(深い…この姿勢では…)

あたしは簡単に持ち上げられる…)

どうだ！この快感、味わったことなかったんだろ！

はっは、おまえみたいな小娘は、

オナホみたいに使われるべきだ！

こういう運命だと認めればいいんだぞ！

めっめっ

めっめっ

びゅん
びゅん
びゅん

(あたしは…オナホ？ダメだ、
もう思考ができない…
いく、またいつちゃう)

(もうちゃんぽ以外、
何も考えられない…)

(毎日こんなに気持ちよくいけるなら…
オナホでも…いい…あたしの体は、
男たちの玩具だ)



うわ、さすがホス。乱暴しすぎだな。
まだ息してんのか？

そんなバカな。ちっちゃいけど、
妖狐の体は頑丈だ。
いくらいじっても壊れない。

へへ。なんなら、
タマシヨンの中身開けたいわ。
毎日欲望ばっかまけてやる！

(えへへ…
閉じ込められて男たちの
肉便器にされるのか…)



閉じられても抵抗をしない。
なんて淫乱な狐は！
自分も随分楽しんでんじゃんかよ！

おいおい、俺らの足音を聞こえたら、
乳首も立ってんのかよ！

そその大きなちんぽでどうぞ、
あたしの体をきつく、
はげしく犯してください…

ははははー安心しろ！
毎日ちゃんとやってあげるよ？

「あの神々しい妖狐さん、郊外のダンジョンにいくっていったら、姿が見えなくなったよね！」
妖狐さんは、何かあったかな」

「でもあんなに強い妖狐さんのことだから、
ダンジョンを討伐するなんて簡単な仕事だと思っよ。

しかもあのダンジョンには魔物がもういないそうぞ。」

妖狐さんが魔物をやっつけて、そして遠くに行ってしまったに決まっている！」

「強者はみんなそうだった！」

.....

「九輪さんはいま、どこにいるだろう？」

山賊

金銭に執着し、手段を選ばず、陰険で狡猾のドスケベな男たち。
山やダンジョンで待ち伏せをして、旅人を襲うのはその得意なところ……
先日襲った豪商の馬車の中から珍しい道具を見つけたようだ……

九輪

人間界を歩く妖狐。常人よりはるかに高い能力値を持つ。
自分の実力に絶対的な自信があり、
一般人とのやりとりを価値がないと思っている。
でも決して彼女には弱みがないというわけでもない……

